Chapter 35 : **ビーチパーティー Part 1**

ある晴れた日、8匹のイーブイ進化系たちは、待ちに待ったビーチパーティーのために全員集合していた。それぞれのタイプや性格にぴったりな役割を自然に担っていた。

* ブラッキーは、火の男子の頼れるお父さん。サングラスをかけて日陰に座り、救急キットを手元に構えて、非常時のヒーラーかつ安全見張り役を務めていた。
* エーフィは、火の男子の穏やかなお母さん。ビーチヨガを仕切り、砂の上で超能力小説を読みながら、時々息子がまだ生きているかを確認していた。
* ブースターは、みんなに愛される火の男子。グリルステーションを担当し、激辛料理をスポーツのように独占し、自慢の舌を焼くようなファイアケバブを誇らしげに焼いていた。
* グレイシアは、水の女子の落ち着いたお母さん。氷担当として氷河のバーテンダーのごとく飲み物を冷やし、熱波に睨みをきかせていた。
* リーフィアは、水の女子の明るいお父さん。フルーツサラダと自然派ラップを手際よく作り、オーガニック食材のみを使った料理スタイルを誇っていた。
* シャワーズは水の女子であり、ブースターを見守るしっかり彼女。青い水着スカート姿で波打ち際をパトロールし、水分補給係兼ライフガード彼女として、またしても燃えたブースターを救う準備は万全だった。
* サンダースは、元気すぎる孤児の電気の男子。ロマンチックかつテンション高めのビーチミュージックを流しながら、非公式の用心棒兼避雷針としても機能していた。
* ニンフィアは、いつも輝くトランス女性の先生。日傘を手にビーチを優雅に歩き、雰囲気を乱す者には愛を込めてしっかり説教していた。

混乱のピークが訪れたのは、ブースターが自分で焼いた激辛肉を食べ過ぎた時だった。汗をかくだけでは飽き足らず、うっかり口から火を吹いてしまい、ちょうど近くでココナッツを飲みながらライフガードをしていたカメックスの顔面を直撃した。

今日の暑さとドラマにうんざりしていたカメックスは、ためらうことなくブースターを火の玉ミートボールのように海へ吹っ飛ばした。

その様子を見ていたシャワーズは、冷たい水を飲んでいたが、ため息をついてグラスを置き、優雅に飛び込んで――通算69回目の救助へ。いつものようにブライダルスタイルで彼を抱えて戻ってきた。ほっぺをふくらませながらも、心は温かかった。

そのタイミングで、サンダースがラジオをスローでロマンチックな曲に切り替える。カメックスは思わず顔をしかめ、呻きながら、呪われたイーブイ一家から静かにサーフボードで去っていった。

その少し離れた静かな浜辺では、アマージョがフルーツポンチを飲みながら、リーフィアが育てているガーデン事業のために持ってきたフルーツの種を確認していた。持続可能な誇りに浸っていたのだ。

その隣では、ガラルギャロップが優雅にくつろぎながら「友情は魔法よ～」とハミングし、うなずいていた。

少し後方では、ゲンガーとヤミラミがさっきカメックスに水風船でいたずらをしかけたが、逆に彼にゴミ箱へと投げ込まれていた。逆さまに突き刺さったまま、尊厳も一緒に落ちていた。

ギャロップは、ティーカップを一口すすりながら、流れるような口調で宣言した。

「友情は、魔法よ。」

そして夕日が沈むころ、スパイシーなキス、治療用の包帯、ダンスミュージック、そしてびしょ濡れのイタズラっ子たち――すべてが混ざり合い、また一つ、ポケトピア：アンヒンジドの中で、馬鹿げていても心温まる思い出となった。